

地図をめぐる出会い

西 川 治

美しいめぐりあい、それは人生の至福である。ふとした折に思わぬところで、優れた人、すばらしい作品に出会う喜び、それはたまさかの恵みかと思われようが、やはり日ごろの夢や憧れが、ひそかに手引きをしてくれたおかげでもあろうか。

国立歴史民俗博物館の創立者井上光貞先生との再会には、1979年3月22日、元禄界大絵図をめぐる文化庁の会合においてであった。それを契機として井上先生の御意向にも従って始めたのが、明治期地籍図の研究と保存運動である。それが縁となって1982年の秋には、日本地名研究所長の谷川健一先生のご推挙をいただき、世耕政隆自治大臣の文化懇談会において、地籍図の文化資源的価値について説明する機会が与えられた。座長は国立民族学博物館長の梅棹忠夫先生。初めて直接御意見を伺う幸いに恵まれたが、いらい財団法人地図情報センター理事としても、地図学博物館運動に対して親身の御指導をいただいているのである。

去る3月1日、大阪のホテルで梅棹先生の昭和62年度朝日賞の受賞祝賀会が催された。800人をこす参会者の一人として私もお喜びを申し上げることができた。

それに先立って大阪外国語大学の図書館を訪れた。昨年の11月19日（木内信藏先生喜寿のお誕生日）にオープンした地図コーナーを拝観するためである。図書館長の山口慶四郎先生は、わざわざ千里中央の駅まで出迎えて下さった。先生には昨秋、神戸市立博物館における地図講演会（地図情報センター主催）においてお近付きになれたばかりだが、地図のあやなすご縁に甘えたのである。

早春の小雨そぼふる中を箕面の丘のま新しいキャンパスに着く。遠く民博の森や茨木市街を望む記念館で昼食をいただきながら、地図コーナー作りのご苦心談をうかがう。先生のご専門はソビエト経済論だが、学生部長を経て図書館長に就任されるやいなや、その一角に地図の専門コーナーを設ける構想を立てられた。折しもその熱意に共鳴したかのように奇得な卒業生が現れて、「地球を見渡せる世界一の図書館を」と（朝日新聞87.11.25）、快く1,500万円の私財を提供されたのである。実業家、広岡寅治氏（82才）である。仰ぎみる図書館の玄関上壁には、同氏の厚意を記念する大きな世界地図が

もろ手をひろげて、40数か国からの来館者を歓迎する。

その広岡記念の地図コーナーの入口では、司馬遼太郎氏の揮毫、「丈夫志四海、萬里猶比隣」（魏の詩人曹植）が、まず人目をひく。山口先生の級友の見事な祝詞である。収蔵資料はすでに250点余、40㎡あまりの部屋は、まさに世界の縮図、中央のガラスケースにはミュンスターの世界図、中世の世界図「マッパムンディ」、ケアリーの「新英国地図帳」などが並び、書棚にはブラウの大アトラス12巻などが林立、壁面にはモンゴル、タイ、ベトナムなど各国語の全国図が巧みにレイアウトされ、留学生たちの郷愁をしばしやわらげる。中国語の地球儀や西ドイツ製の太陽・地球儀も珍らしい。もちろん、メルカトルやオルテリウスのアジア図、コロネリの日本地図（1692年）なども精彩を放っている。

当外大には17の外国語講座があり、最新のLLやビデオルームが完備し、近く4か国のテレビ放送も受信できるようになるが、これと共に地図類の収集・展示も他大学に率先して力を注ぎ、ゆくゆくは地図館にまで発展させたいとのこと。地図学博物館運動を推進している者にとっては何よりの貴重なモデルであり、励ましである。世界の友よ、ここに集いて地球を彩る民族模様を、地表面を象どる地図文化に大きく目を開こう、古地図のメッセージに耳を傾け、明るい未来のグローバルコーラスを共に歌おう！

この日、出会いの歓喜は地図コーナーにとどまらなかった。図書館の奥深く蔵された石浜純太郎博士の文庫では、「夢の代」（文政3年、12巻5冊本）にめぐりあえた。山片蟠桃（1748-1821）の実学的ライフワーク、「天文第一」、「地理第二」から始まり、雑論第十二に終る壮大なコスモグラフィーである。大阪の豪商升屋の番頭として、夜なよな行燈のもとで書きつづけて、遂に失明した町人学者、その詳論は末中哲夫博士の大著（清文堂、1971）にゆだねるにしても、日本思想史大系43（岩波書店、1973）所載本あたりで、せめて「地理第二」なりとも読むことをすすめたい。今の世は夢にことよせずとも、自由に語れる仕合わせな時代であり、空高く地球を駆けめぐること夢ではなくなった。それだけに、なおいっそう大きな夢とのめぐりあいに熱い期待をかけている昨今である。（立正大学）